

<著者は語る>

『スポーツの世界史』

坂上康博、中房敏朗、石井昌幸、高嶋航編著、一色出版、2018年。

坂上康博（一橋大学）

インタビュアー：青野桃子（一橋大学大学院）、山本夏生（一橋大学大学院）

第3号では新たな試みとして、スポーツに関する書籍を刊行された著者のかたにインタビューをおこなうコーナーを掲載することになりました。今号では、2018年10月に『スポーツの世界史』を刊行された坂上康博先生に、執筆の経緯やご苦労など、お話をうかがいました。



【目次】

- 序 章 「ルードゥス」から「スポーツ」への道のり
- 第1章 イギリス 近代スポーツの誕生
- 第2章 フランス スポーツの魅力を引き出す「遊び」の精神
- 第3章 ドイツ 市民的結社としてのトゥルネン協会とスポーツクラブ
- 第4章 スペイン 「モザイク社会」の中のスポーツ
- 第5章 チェコ 世界最大のスタジアムでの大規模なマスゲームの祭典

- 第6章 ハンガリー 市民社会における暴力とスポーツ
- 第7章 ユーゴスラヴィア 多民族統合の象徴からナショナリズムの担い手へ
- 第8章 ソヴィエト／ロシア スポーツ大国の成立と再生
- 第9章 アメリカ 「レベル・プレイングフィールド」を目指す限りなき挑戦
- 第10章 カリブ海地域 バックヤードのアスリートたち
- 第11章 ブラジル 「人種」を通してみたサッカー小史
- 第12章 アルゼンチン、ウルグアイ、チリ スポーツからみる南米の政治史
- 第13章 オーストラリア スポーツは国民文化
- 第14章 アフリカ大陸 「スポーツとはなにか」を世界に問いかける大地
- 第15章 イスラーム 近代との調和
- 第16章 インド 植民地経験からクリケット大国へ
- 第17章 シンガポール 東南アジアの一都市国家における帝国の遺産と世界的野心
- 第18章 フィリピン アメリカの「黄色い弟(リトル・ブラウン・ブラザー)」とそのスポーツ
- 第19章 中国 「東亜病夫」からスポーツ大国へ
- 第20章 朝鮮／韓国 スポーツに託された解放と統一の希望
- 第21章 日本 スポーツと武術／武道のあゆみ150年
- 終 章 グローバルスポーツへの展開 スポーツはどこへ？

※Webコンテンツ

書籍ご購入後、一色出版ホームページの「webコンテンツ_スポーツの世界史」の該当欄に、巻末に記載されたパスワードを入力すると、書籍の内容全てがウェブで閲覧できます。各デバイスに対応しており、文字・写真の拡大、キーワードの検索も可能です。

Q. まずは、今回の出版の意図についてお話を聞かせていただけますか。

『スポーツの世界史』の出版元である一色出版では、『金融の世界現代史』などの世界史シリーズの出版も手掛けていて、その一冊としてスポーツの世界史をやりませんか、という話が来ました。具体的にどのような本にするかは決まっていなかつたんだけど、これはひとりではできない仕事なので、あと3人編者になってもらって、計4人でどういった中身にするかを相談していきました。企画の段階では、スポーツの種目別にするとか、テーマ別、問題別、つまりジェンダーや政治、商業主義、人種や民族とか、そういうテーマにそって章立てするということを考えました。

だけど、最終的には国別にしました。読者対象を一般の方と想定すると、問題別はやっぱりなじみにくい。種目別の本はすでに結構出版されているし、また、やるとなるとわりと難しい。少しの国にしか普及していないものとか、種目によって大きな差があるので、何を取り上げるのかとなると、実は結構難しいですね。また、日本の場合だと、民族スポーツとか伝承遊戯とかに重点をおいた人類学をベースにした本がすでに出ています(『図説スポーツの歴史』『図説スポーツ史』など)。これらの本は、かなり大きくて本格的なものなのですが、一般的の読者がスポーツと聞いて思い浮かべるのは、やっぱりオリンピック競技を中心とした世界のメジャースポーツでしょう。なので、各国の民族スポーツもできるだけフォローしながらも、イギリスとアメリカを中心にして生まれた近代スポーツをメインに据えて、その成り立ちから、

国際的な普及、つまりどういう文化として世界各国に受け入れられ、広がっていったのかということを中心としたものにする——そんな流れができました。

そうなると問題は、どこの国を取り上げるのです。しかし、取り上げたい国があつても書き手がいないとダメ。なので、どうしても落とすわけにいかない国は、もう何が何でも書き手を探し出して、頼み込んで、ということで結果として21か国と3地域ということになりました。このうちの3地域——アフリカ大陸、イスラーム圏、カリブ海がかなり広域にカバーしてくれているものもある、それなりに世界を網羅できたかなという感じですね。落ちているのは、北欧の国々やイタリア、カナダなど。アジアを充実させたかったので、本当は東南アジアをもう一か国ぐらい入れたかったけど書き手がいなくて。若干心残りはあります、世界に例がない本になっていると思います。

意外にも、たとえば『ヨーロッパスポーツ史』なんて本もないんですよ。あまりにも国ごとで違いすぎるため、そのような本をつくろうということにならないのだと思います。あとは言語の問題ですね。外国語ができると書けないから、それが大きな壁なんですよ。逆に日本でそれをやったというのは面白いish。ヨーロッパからも、アメリカからも遠く離れた日本は、それらの国々と一定の距離感を保ち、客観的に見るというスタンスを保つことができます。これはやっぱり面白いところじゃないですかね。

ほとんどのスポーツはイギリス生まれ。サッカー、ラグビー、卓球、バドミントン、陸上競技、水泳、自転車、ボート、アーチェリー、ホッケー、射撃、スケート、カーリングもそう。それぞれのスポーツがどこで生まれたのかということは、ほとんどの人は知らないでしょう。その種目を長くやってきた人だつて、あまり知らないよね。そういう情報がすごく欠落している。ネット上の情報でも、どこが強いかとか、どんな戦術を取ってい

るかとか、勝敗にかかわることが中心で、歴史的なことというのはなかなかないよね。近代スポーツが20世紀をとおして、どういう風に、国境を越えて、広がつていって、どういう風に受け止められて、普及してきたのか、そして現在どのような状況にあるのか、全体的な流れを描いたのが、この本の特徴かなと思います。

また、最後に2018年時点の国際競技連盟と世界大会の一覧表というのが掲載されていて、これを見るとどういう種目が、どんな国際組織を作つて、どんな大会を開催しているのかというのが一目でわかるんだけど、これを見ると、スポーツは、オリンピック種目だけじゃないんだ、ということが実感できます。オリンピック種目はメジャーなんだけどごく一部で、そういう全貌が見られるというのもこの本の特徴かなと思います。

Q. 本の構成としては、スポーツの大半が生まれたイギリスからスタートして、日本にくる
と。最後はグローバルな視点になっています
ね。

並べ方、構成が難しかったです。いろんな並べ方があるけれど、スポーツの母国はイギリスなので、それを第1章にしました。第二の母国となると、本当はアメリカなんだけども、そこから先は世界地図にそって、まずはヨーロッパ。偶然なんだけど、ソヴィエト／ロシアとアメリカが第8・9章で並んでいます。冷戦時代の両国の対立のことなども、両国が並ぶことでより明確になったのではないかでしょうか。

オーストラリアは、スポーツ史で見てみると、イギリス産とアメリカ産とが混ざついて特徴的な国だなと思うんですね。クリケットやラグビーが盛んな一方で、野球やバスケットボールなども人気がある。それもあって、南北アメリカのあとにオセアニアの国ということで並べました。最後がアジア・アフリカです。日本がアフリカやイスラームの国々と一緒にというのは、あれっと思う人もいるかもしれないけど、世界的にみたらこうい

うくくりになると思います。このあたりもぜひ感想を聞かせていただきたいです。

最初から合意があったわけじゃないんだけど、編者のあいだで議論をして、「スポーツが世界史を創ってきた」というメッセージも込めました。スポーツは歴史や社会によって一方的に規定されているだけでなく、逆に歴史や社会を創っている、そういうパワーやメカニズム、影響力も持っている。各章を強く貫いている主張ではないけどね。

国別になっていることで面白いのは、いくつかの章を読むと、それで自然とそれぞれの国のスポーツの歴史を比較することができること。読み進めるに、それが面白いし、新しい発見があるんじゃないですかね。あとはサッカーだったら、サッカーを索引でみて、その記述だけを拾い読みしていくという使い方もできます。活用の仕方もいろいろあると思ったので、索引はかなり力をいれて作りました。

Q. 時代的に、適任者がいなかったもの、研究的な空白地帯はありましたか？

近現代を中心としたので、漏れはそんなにないと思っていますが、各章が短いのでいろんなものを取り込んで総合的にかつ詳しく書くというのは分量的に無理。だから視点を定めて、特徴を出してほしいと著者に伝えました。ナショナル・アイデンティティ、ジェンダー、メディア、あるいは人種問題等々。その国や地域の特徴を示すようなものに焦点化することで、スポーツをとおしてその国の歴史や社会のあり方がわかるような、そういうスタイルをとってくださいと注文しました。

それと同時に、その国や地域のスポーツ史に関する基本的な事項は必ず入れ込んでほしい、つまり通史として必要最低限のものを書いていてほしい——これは大変な注文ですね。いつもは、どこか時代を限定して研究しているのですが、この本ではそれを広げて書かなければならぬので、みなさん大変だったと思います。100年を超える歴

史の流れをまとめるとなつたときに、すごく難しいのは、何をピックアップし、何を重要なものとしてクローズアップするかということ。逆にいうと何を切り捨てるか。ターニングポイントがどこかが明解にわかっていないとできないわけで、ずいぶん大変。もちろん自分自身がやってみても大変でした。論文だったら、たいていある時期を詳しく掘り下げて終わりなんだけど、トータルでみたときに、一番大事なのはどこですか、あなたは何を大事にしているのですか、という核心部分が明確に表れるわけです。丸裸にされるような感じですね。研究者の方にはぜひこの点を厳しく吟味していただきたい。私たちとしては、各国のスポーツ史研究の到達点をコンパクトに示すことができたと思っていますが、研究をさらに前進させるために批判的な吟味をぜひお願いしたいですね。

Q. 企画の段階であった、テーマ別という要素は、それぞれの章で執筆者の方が、生かされていますよね。

通史をめざしていただいたので、もうちょっと立体的なものにはなっていると思うけど、やっぱり当初思っていた論点はそれぞれの章に入っています。全体としては、人種問題なども含めて、政治との関係というのは強いと改めて思いました。近代国家が生まれて発展していくということと、近代スポーツの誕生はオーバーラップしているので、政治の問題はやっぱり絡まっている、と感じましたね。たとえば、冷戦時代がいかに異常だったか、激しかったかということも、この本の中で結構出ていると思います。ソ連時代のメダル獲得数が象徴的です。

南米では軍事独裁国家、軍政がしかれて、民衆がスポーツで操られていて、スポーツが道具みたいになっていたという側面がたしかに強いです。例えば1980年の「ムンディアリート（ミニ・ワールドカップ）」と名付けられたサッカー国際大会。これはウルグアイで、W杯50周年を記念

して、W杯で優勝したことがある国だけを集めて開催されました。なぜこのタイミングでやったかというと、政府の側には政治的な思惑があって、軍が政治介入できるような憲法改正を国民投票によって実施し、それが実現した直後にミニW杯で盛り上がる、というストーリーを描いていました。しかし、実際には憲法改正が国民投票で否決されるんだよね。そして否決された直後に、この大会でウルグアイが優勝したこと、「憲法改正させない、憲法を守った」というむしろシンボル的なイベントに変わったというところが、非常に劇的ですね。

アフリカではアパルトヘイト問題。南アフリカが、ひどいアパルトヘイト政策をとっていて、国連でも批判の決議をして、スポーツ交流を断絶させる。国際的な試合をやらないということを決めるんだけれども、ニュージーランドとか、イギリスがそれでも交流を続ける。それに反発して、ニュージーランドが出るならわれわれは出ないといって、アフリカの29か国がボイコットしたのが、1976年のモントリオールオリンピックですね。この本の第14章に書かれていますが、ぼくはこの章を読むまでは、ニュージーランドがひどいと単純に思っていました。だけど、このときのニュージーランドやイギリスの立場は、「スポーツで交流しながら、南アフリカの政治家たちの考えを変えていく」というもので、こちらも重要な選択肢ですよね。人権を無視し、抑圧するような政策に対して、スポーツでどういう対抗手段に出るのかというときに、複数の選択肢というものがその当時あったということ。今に通じる問題で、改めて考えさせられるものだと思います。賛否両論あるけど、やっぱり複数の違う意見を並べて考えてみることは、われわれの理解を深めるうえでの大切な素材じゃないですかね。このような考える材料みたいなのが、この本のあちこちに入っていると思います。

第7章のユーゴスラヴィアなどは、スポーツが人々の対立を深めるものであると同時に、共存や

絆を強めるものもあるという、両面がクリアに出てると思います。ブラジルのサッカー選手の髪型の変化も興味深い。白人に似せるような髪型をやらざるを得なかつた時代があり、そんな中でペレがいかに画期的だったか。すごく些細なことのように見えるけれど、重要な変化をそんなところからも知ることができます。この本では写真をかなりたくさん使いましたが、それによってわかる歴史の面白さもいくつか示すことができたと思っています。こんな国のスポーツのことなんて知らなかつた、というのがいっぱいあり、手にとってくれたそれぞれの方の興味に沿つて読んでもらえると思います。

エピソードや人物もクローズアップしてほしい、と筆者にお願いしました。野球、サッカーという種目であつても、それをプレーしているのは人間であり、それぞれが顔を持つ個別具体的な選手だつたり、一般の愛好者だつたりするわけです。スポーツ史というのは、その人間を通じて、歴史を具体的に見る、生々しくリアルに見るわけですが、この点も著者の方々にかなり努力してもらつたと思っています。人間を通じて、そのスポーツ、国のことを探ることができる、わかるということも大事じゃないでしょうか。

Q. 第二弾はあるのでしょうか

何年後かに、ぜひ若い人たちでやってもらいたい。先にも言いましたが、この本で、それぞれの国のスポーツ史研究の到達点をコンパクトに示すことができたと思っています。著者にお願いしたのは、一次史料や独自のデータに基づく論文集ではなく、各国のスポーツ史の最も基本的な文献をフォローして、日本の読者にわかるように書いてもらう、ということでした。参考文献にもかなりこだわって、基本文献はこれをみればわかるはずです。あとはみなさんが頑張ってくださいということですね。ここから先は、あとの方で、考えてやつていってほしいと思います。スポーツの世界史つてもっと違う描き方があるんじゃないかな、ア

プローチがあるんじゃないかな、そういう議論が出てくれば、一番うれしいです。外国史を研究する人も減ってきたしね。研究するとなると語学の問題もあるし、すごく時間がかかるから……。そういう意味でも、後継者、次の世代の人に対してほしいと思います。

2018年11月26日（月）一橋大学坂上康博研究室にて実施。

編集後記

『現代スポーツ研究』も第三号となりました。

本号では、2018年3月28日に開催した第7回研究会シンポジウム「2012年ロンドン・オリパラで残されたレガシーは何であったのか?」を特集として掲載しました。「レガシー」という言葉は、一般にもすっかり定着した感がありますが、その中身については多様に解釈されているようです。シンポジウムの議論をもう一度誌面で展開することで、読者の方々にも、とりわけ、2020年東京大会を巡って、「レガシー」がどのように使われているのか、是非考える機会にしていただければと思います。

本号では、新しく「著者は語る」というコーナーをもうけました。近年、書店などが主催して、著者が聴衆に向けて出版の意図や経緯を語ったり、読者からの反応を直に受け取ったりするような会も増えています。海外では、著者による自著の朗読なども頻繁に行われ、「本を書くこと（書く人）」が身近に感じられる機会となっています。なかなか手に取りにくい研究書や専門書ではありますが、どのような意図で書かれたのか、あるいはアイデアはどのような過程を経て本となるのか、著者や編者などに語っていただき、研究書や専門書などを身近に感じていただければと思います。

今回、編集作業が遅延として進まず、発行が遅れましたことをお詫びいたします。他方、論考、研究ノート、実践報告、書評、著者は語る、と種々の原稿を投稿いただきました。学術的な議論の場としてはもちろんですが、スポーツを科学的に捉えるための足がかりとなるように、今後も努力していくきたいと思います。本誌についての忌憚のないご意見、ご感想、ご要望、そしてみなさんの投稿をお待ちしています。

(坂)

【編集委員会】

坂なつこ（編集委員長）、青沼裕之、青野桃子、笛生心太、中村英仁、棚山研

現代スポーツ研究

Vol. 3

2019年3月1日 発行

編集・発行 新日本スポーツ連盟附属スポーツ科学研究所
〒170-0013 東京都豊島区東池袋2-39-2大住ビル402

TEL 03-3986-5401 Fax 03-3986-5403
E-mail science@njsf.net
